

伯耆大山～北壁：別山バットレス、弥山尾根西稜～

【報告者】I谷

【日時】2018年3月17-18日

【天候】晴れ

【参加者】A・K、I谷（左記二名、ピナクル山の会）、M森、O田（想山会）、
T上（フェニックス・マウンテナリング・チーム）

《コースタイム》

17日(別山バットレス)：8:30 大山寺発 10:00 元谷小屋発 15:00 夏道登山道と合流 16:00 元谷小屋

18日(弥山尾根西稜)：6:30 元谷小屋発 10:00 弥山山頂 11:30 雪上訓練 12:30 元谷小屋

《 報 告 》

17日の朝8時に大山寺の駐車場にて今回の山行のメンバー全員が顔を合わせた。これは、I谷が現在の居住地である大阪からバスで大山入りするのを他のメンバーが待ったためである。私、I谷のわがままを受け入れてくれたメンバーに心から感謝する。大山寺の旅館街の道はいったん溶けた雪がツルツルに凍っており歩行に注意を要す。駐車場で装備を確認し、わかんは持って行かないことになった。辺りを見回すと雪はもうすでに少ないようだ。

大山寺から元谷小屋への途中、大神山神社で登山の安全を祈願する。私は神様の存在を信じていないが、自分なりに神様とは何かと考えるとそれは要するに自然のことだと思った。自分にとって、神様に祈ることは自然の前で謙虚になろうとする行いと言える。

元谷小屋には3人の登山者がいた。2人はハイカーで休憩中の模様。もう一人の若い男は広島からのソロクライマーでこれから我々と同じ別山バットレスに取り付くという。先週弥山尾根から別山バットレスを見て行けると思ったという。男は、お先にと行って出て行った。小屋には数枚の銀シートと毛布が置かれており使うことができる。これらを敷き、我らの陣地を小屋の中に確保する。その片隅に宿泊用の装備を置いておく。アタックザックにはツェルト、行動食その他を入れハーネスを着ける。アイゼンとザイルはまだ使わない。小屋の後ろの林の中を別山バットレスの取り付けへ向かった。

バットレスの取り付け近くまで、アイゼンを付けずにキックステップで登った。取り付け付近はそこそこの斜度がある。自分が判断するとしたらもっと手前でアイゼンを付けたらう。アイゼンを付ければ足元のグリップは良くなる。しかし、良くないこともある。それは足が重くなることから、疲労が早まることと、ペースが遅くなることだ。山登りでは、早く移動できることが大切なのだが、アルパインクライミングでは早く移動することを強られる。ルート上は基本的にどこも危険であり、雪崩、落石、滑落などリスクはいくらかもある。そこに長時間いれば事故に遭う確率は高まるだろう。

取り付け近くの斜面にバケツを掘り、そこでアイゼンを付けロープをハーネスに結んだ。2人と3人の組に分かれた。先行するのはM森、A・Kの組で、その後ろにT上、I谷、O田の組が続いた。先行の二人はつるべで、後ろの三人は上記の順序を変えずに登った。別山バットレスは斜度がきつく、クライミング要素が比較的多いルートであり、核心部はスタカットで登ることになる。

T上さんの登りを見ていると、草付きを上手くとらえながら登っている。ルート上に深い雪は既に残っておらず、ピッケルは岩に引っ掛けるか、凍結した土に打ち込むことになる。草付きの下には比較的深い土があり、岩と違って、ここにはピッケルを打ち込むことができ、良い手掛かりとなる。

別山ピークへは向かわず、手前の雪壁をトラバースするというルートをとった。ここがこの日の自分にとっての核心部というか、極めて緊張した。雪壁はかなり切り立っており、ここに足を蹴り込み、手

を壁についてバランスを取りながら、横へ移動していく。ここをリードで進む時、彼らは何を考えているのだろうか。別山から夏山登山道方面へ延びる痩せ尾根の上には全然雪が残っていなかった。遠慮なくフィックスロープをつかんで痩せ尾根を通過する。痩せ尾根を過ぎると、T 上さんがコンテから外れ、O 田さんと I 谷は 5m の間隔を開け、アンザイレンして進む。最後のやや傾斜の強いところを登り切ると夏道登山道の石室に近い辺りに出た。

元谷小屋に着くと、まず水用の雪を集め夕食の支度にとりかかる。食べる前にビールで乾杯、そして M 森さんが準備してくれた雑炊を皆でいただいた。小屋の中にはラジオの歌謡曲が流れている。登攀中の緊迫感があったがゆえに、この和やかさが際立つというか、ありがたいものとして感じられる。飲み食いしながら、酒のつまみは何がいいとか、良い登攀とはどのようなものかなどわいわい話す。

二日目、3月18日は弥山尾根西稜に取り付いた。昨日はほとんど風がなかったが、この日は若干の風があった。パーティー編成は昨日同様だが、順序を変更した。A・K、M 森組はルート of 3分の2をA・Kさんが、残りをM 森さんが登った。I 谷、T 上、O 田組はI 谷が全区間をトップで登ることになった。これは、私のトレーニングのために胸を貸していただいたものであり、配慮に大変感謝している。T 上さんによると、弥山尾根西稜ではザイルは不要とのことだが、私に配慮してザイルを使用することとなった。

取り付きから威勢よく掛け声を出して登り始めるが、20mも登り始めると勢いがなくなるのが自分でも分かった。20mでも高いのだ。支点から離れるにつれて動きが硬くなるのが分かる。支点を取ろうとすると、後ろから「近い！」と声をかけられ、スリングを再びギアラックに掛ける。支点の数はロープ1本に対して1つでいいという。中間にリッジ、立木、岩などロープが引っ掛かるものがある場合は、人工的な支点はとらない。これはもちろん登攀速度を上げるためである。尾根を回り込み、後続の姿が見えなくなっても「早く行けー」との声が聞こえる。T 上さんの前後にはザイルいっぱい距離を取っており、私からO 田さんまでは約100mの距離がある。後続はザイルのたるみが取れるまでは前進できない。

途中、岩が露出した傾斜の緩いリッジを進むと、やや傾斜の強い雪の斜面となる。かすかに膝が震えるが、余計なことを考えると動けなくなることは分かっている。心を無にして前進する。私は、両手をつきながら登ったが、普通この程度の傾斜では手はつかないという。休憩なしで登り続け、ペースが上がらない。後ろを振り向くと、T 上さんとO 田さんが同じところにいる。私が遅いのもう一本のザイルは仕舞ったようだ。弥山尾根西稜は最後の方は傾斜が緩くなっている。尾根のを登っていくとA・KさんとM 森さんが弥山の三角点ピークのあたりに座っているのが見えた。

下山途中、夏道登山道の6合目付近から別れ元谷方面へ向かう斜面を降りながら滑落停止の練習をした。滑落停止は斜面に腹面を向けるのと、背面を向けてやる方法の2つを練習した。ポイントは滑り出した瞬間に強くピックを雪面に突き刺すことである。速度が出てしまってからでは止まらないし、またピックをしっかりと突き刺さなくても止まらない。さらに、元谷小屋より少し上の、小さな垂直に近い雪壁でピッケル2本を使い、下降後にピッケルを回収できる懸垂下降についてT 上さんから教えていただいた。

元谷小屋を出てすぐの所に第3回雪山講習会のI 富さん達のパーティーに出会った。福岡を離れて2ヶ月しか経っていないが、随分と懐かしく感じる。一緒にぼちぼち下山しながら話す。大山寺の旅館街にある豪円湯院まで一緒だった。今回の山行で会った人達と次に会うのはいつになるのだろうか。山を続けさえすれば会う機会もあるのかな、などと思いながら帰途についた。